

# 1949年以前の同姓団体の生成と現在の再興

## —福建省南部の事例研究—

陳 夏晗

総合研究大学院大学 文化科学研究科 比較文化学専攻

宗族と同姓団体は、中国人社会によく見られる父系親族組織である。福建省南部には、この二つのタイプの父系親族組織が存在している。1949年以前、当地域では、宗族組織が発達した。このような地域社会の秩序の中で、同姓団体が生成された。1949年から1978年までの間、社会主義政権のもとで、同姓団体は宗族と同じように、批判・排除されて解体された時期があったが、1990年代からは、中央政府の改革開放政策のもとで、宗族組織の復活に伴って、同姓団体の形成が再び活性化するようになっている。

これまで宗族については、一定の先行研究の蓄積があるものの、同姓団体の形成過程および現状については、いまだ十分に研究されているとはいえない。本論文は、同姓団体に注目し、その形成の歴史と現状を考察しようとするものである。

成員権が生得的なものである宗族とは違い、同姓団体は任意加入の社会結合である。同姓団体の出現は宗族よりも遅い。任意加入団体の形成は、つねに特定の社会的需要や社会変動に応じたものである。変化している社会的環境のもとで、人々は任意加入団体への参加によって自らの現実的なニーズに応じて新たな環境に適応しようとする。したがって、任意加入の結合である同姓団体を理解するにあたっては、同姓団体の生成・展開だけではなく、その生成・展開と社会環境や社会変動との関係が欠かせない視点となってくる。

筆者の調査地の福建省南部は、宗族組織が発達してきただけでなく、地域内外で活躍する商人を輩出してきた地域である。近年では経済発展が著しい地域として知られている。本論文では、当地域の同姓団体の事例に注目しつつ、1949年以前と1990年代以降という二つ時代的区分に従って、それぞれの時代における同姓団体の形成と社会的背景や社会変動との関係を検討してみたい。

キーワード：福建省南部、同姓団体、任意加入の社会結合、地域社会の秩序、商業化

はじめに

1. 1949年以前の同姓団体

1.1 同姓団体の生成

1.2 宗族の発達する地域社会の秩序と同姓団体の形成

2. 1990年代以降の同姓団体の再興

2.1 同姓団体の復興

2.2 同姓団体の組織構成

2.3 社会変動と同姓団体の再興動向

2.4 民間主導・政府介入の同姓団体の復活

2.5 考察

3. 結論

はじめに

宗族と同姓団体<sup>1)</sup>は、中国人社会によく見られる父系親族組織である。明確な父系血縁に基づいた宗族組織は、社会制度上、重要なものであり、中国社会の人間関係や社会構造の骨格をなすものである。同時に、父系親族関係は、同姓であることを根拠にして、明確な父系血縁関係を持たないにもかかわらず、同姓の宗族や個人の間まで拡大できる。このような擬制的父系親族の社会結合は同姓団体と呼ばれる。福建省南部には、この二つのタイプの父系親族組織が存在している。福建省南部における同姓団体には、「同姓宗族の連合」と「宗親会」のような形が存在する。宗親会は、組織の定款・選挙を通して選出された指導層・事務部門・事務所・活動資金といった組織的要素をもつものであり、独自の運営組織をもつ組織体である。一方、同姓宗族の連合は、そのような組織的要素をもつものではなく、独自の運営組織をもつ組織体とは言えない。

北宋中期以降、官僚と知識人の活動、とくに范仲淹の義荘、蘇洵・歐陽修の族譜編纂法、張載・程頤・朱熹・王陽明などの知識人の「宋明理学」理論の登場によって、祖先祭祀を中心とする宗族組織の形成が庶民の間に広がったが、とりわけ東南中国の福建省においては、明代以降宗族の組織化が広くみられるようになり、宗族組織の存在と活動は人々の日常生活に大きな影響を与え、郷村における社会生活と秩序に関わる重要な要素となっていた (Freedman 1958, 1966; 陳 1991; 鄭 1992)。そのような地域社会における

秩序形成の過程において、宗族を基本的な単位とし、同姓であることを根拠にして、共通の祖先および祖先祭祀を結合の契機として、複数の市・県に跨がる複数の同姓宗族の連合と宗親会を形成していく動きが現れた。

しかし1949年から1978年までの間、同姓宗族の連合や宗親会は宗族と同様に、共産党政府によって批判・排除され、解体された時期があった。1980年代からは、中央政府の改革開放政策のもと、宗族組織の復活に伴って、1949年以前に存在していた同姓宗族間の連帯関係が再び強化され、宗親会の組織作りが盛んになった。

これまで宗族については、一定の先行研究の蓄積があるものの<sup>2)</sup>、同姓団体の形成過程および現状については、いまだ十分に研究されているとはいえない。本論文は、同姓団体に注目し、その形成の歴史と現状を考察しようとするものである。

成員権が生得的なものである宗族とは違い、同姓団体は任意加入の社会結合である。同姓団体の出現は宗族よりも遅い。任意加入団体の形成は、つねに特定の社会的需要や社会変動に応じたものである。変化している社会的環境のもとで、人々は任意加入団体への参加によって自らの現実的なニーズに応じて新たな環境に適応しようとする。したがって、任意加入の結合である同姓団体を理解するにあたっては、同姓団体の生成・展開だけではなく、その生成・展開と社会環境や社会変動との関係が欠かせない視点となってくる。

歴史的に福建省南部は、宗族組織が発達して

きただけでなく、地域内外で活躍する商人を輩出してきた地域である。近年では経済発展が著しい地域として知られている。この地域における同姓団体形成の社会的要因、および社会結合としての同姓団体の規模と地理的広がりをもとに認識するか、また郷村社会の人々はどのような現実的必要性に応じて宗族のような社会制度を拡大し再生産したのかという問題は、同姓団体の形成過程と社会環境や社会変動との関係を理解するうえで、大きな手がかりを与えてくれる。

本論文では、筆者の調査地である福建省南部の同姓団体の事例に注目しつつ、1949年以前と1990年代以降という二つ時代的区分に従って、それぞれの時代における同姓団体の形成と社会的背景や社会変動との関係を検討してみたい。

## 1. 1949年以前の同姓団体

### 1.1 同姓団体の生成

筆者の現地調査によると、1949年以前、福建省南部地域では、林・李・洪・王・陳・邱・董・楊などの姓が、それぞれに同姓宗族の連合を持っていたことが明らかになっている。

林姓の宗族連合は、清代末期（19世紀）に形成されたものである。晋江市において共通の祖先を持つと言われる鐘姓と林姓の二つの単姓宗族村の間で発生した械闘を解決するため、ある地方官僚（県知事に当たる）の提案が結成のきっかけとされる。現在の晋江市林姓宗親会の会報には、林姓の宗族連合が形成された経緯について次のような記載がある（晋江市比干学術研究会1994:9）。

1820年、晋江市において、林姓と鐘姓の二つの単姓宗族村の間で械闘のような武力衝突が発生した。もともと鐘姓の宗族は人口が少なく、弱い立場にあった。当時、この事件を処理した地方官僚はこの鐘姓宗族の子孫で、その数代前の先祖がこの宗族村に住んでいた。

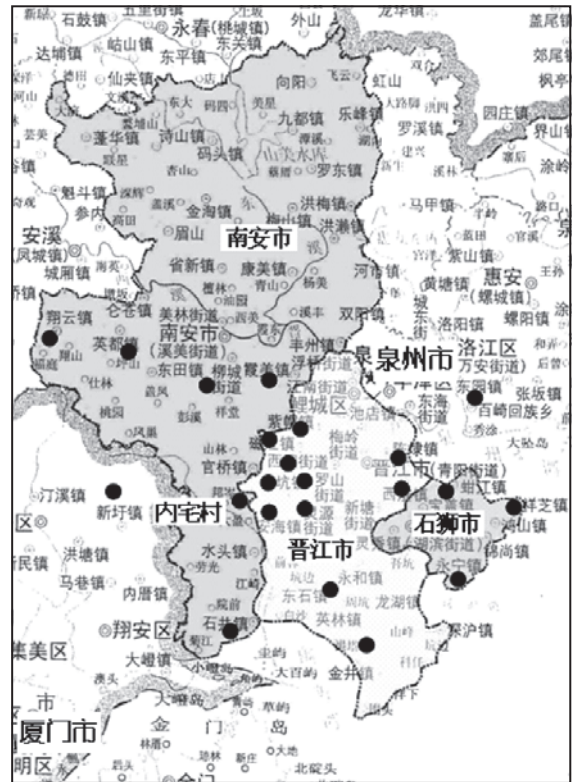


図1 「迎祖」を行った林姓宗族の村落分布図（1951年までの時点）

鐘姓村の人々は、この地方官僚と血縁関係のあることを後ろ楯とし、有利な立場を勝ち取ろうと考えた。しかしこの地方官僚は、地域の長期的安定をはかるためにどちらにも加担せず、両姓の共通の祖先とみなされる比干（紀元前1000年ごろの殷代の歴史的人物）の肖像画を作成し、械闘のあった二つの村が順番に祖先比干の肖像画を供養することを提案した…（中略）…当初、この「迎祖」<sup>3)</sup> 儀礼は二つの宗族の間でのみ行なわれていたが、次第に参加する宗族が増え、二つの村の周辺の八つの村、更には他県の村にまで広がった。1951年までに「迎祖」を行った宗族村の数は56ヶ村に上り、晋江・石獅・南安・泉州・廈門の五つの市県に分布していた。会報によると、「迎祖」儀礼を行った村落として22ヶ村が確認できる（図1）。

先述の「迎祖」儀礼を行った56の宗族村のうち、2つの村以外は、すべて林姓の宗族であった。この儀礼はもともと鐘姓の地方官僚側からの提案で行われたものであったが、実際には林姓の宗族を中心として行われており、林姓の宗族は「迎祖」儀礼を通して宗族間の連帯関係を強化し、宗族連合を作り上げたのである。そのことについて、石獅の林姓の長老たちは次のように語っている。

「迎祖」を行うことによって、各林姓宗族の族長間で面識ができ、宗族間の連帯関係を作り上げ、強化しようという提案があった。また、他姓の強大な宗族に侵害された場合、互いに助け合うことで一致した。

一方、李姓の宗族連合の結成は1622年である。その経緯について、福建省泉州海上交通史博物館長の王連茂は、自らの現地調査に基づいて、以下のように記述している<sup>4)</sup> (王 2006: 116)。

福建省南部の李姓宗族の連合は、1622年、ある李姓の官僚のよびかけによって結成された。この年、南安県J村出身の李継庚という官僚（明万曆38年の進士。後に都察院左都副御史に任ぜられた）が帰省した際、人口の少ないJ村の村人が隣接する人口の多い他姓の村に迫害され、苦しんでいることに気づいた。そこで李継庚は、晋江・南安・同安の三県に分布している24ヶ所の李姓宗族村の族長たちを、J村に呼んで対策を協議した。他姓の宗族村による迫害を避けるため、李姓宗族は互いに力を合わせ、械闘のような武力衝突が起こったら、互いに応援することで一致した。そして、同盟関係を確立するために、李姓宗族の連盟を作り上げることに決めた。また連盟関係を維持・強化するために、これらの族長たちは「五山君懷公」という歴史人物を李姓一族の始祖とし、この祖先の肖像画を作っ

て24ヶ村で順番に祭ることをきめた。「迎祖」儀礼に参加する村の数は次第に増え、清代には66ヶ村にもなったという。

洪姓の宗族連合の結成は1939年であり、その形成過程は上述の李姓の同姓宗族と類似している。その形成過程について、2005年に編集された洪姓宗親会の会報資料において、次のような記載がある（泉州六桂文史委員会 2005: 13）。

南安市南部には、隣接する四つの洪姓宗族がある。そのうちの一つは人口が少ないため、しばしば近くの人口の多い他姓の宗族に迫害されていた。1939年、その宗族の族長は、自らの宗族の勢力を強めるため、そのほかの三つの洪姓宗族に同姓宗族の連盟を確立しようと提案した。…(中略)…その地域では、他姓と比べて洪姓の人口が少ないことから、洪姓同士の連帯関係を強化することは地域社会における洪姓一族の影響力強化に有効であった。そのため他の三つの洪姓宗族村は、その提案に賛成し、洪姓宗族の連盟を結成した。さらに、連盟の関係を維持・強化するため、洪姓の共通の始祖とされる歴史的人物の肖像画を作成して、四つの村で順番に祭ることにした。1944年には「迎祖」儀礼に参加する洪姓宗族村の数が増加し、その範囲は南安県を超えて福建省南部の他県にも及んだ。

同姓宗族の連合は、地域における影響力があればあるほど、そこに所属する宗族にとって有利となる。したがって連合の範囲をなるべく大きくすることを重視しており、少なくともその範囲が縮小しないように努力してきたように見える。上記の事例に共通しているのは、林姓・李姓・洪姓の同姓宗族の連合は、いずれも最初は複数の宗族からはじまり、最終的には幾つかの県に分布する数十の宗族を含んだ広域の連合関係へと発展するという過程を辿ってきたとい

うことである。個々の宗族は宗族連合に参加することを通じて他の同姓宗族との連携を持つようになり、他姓の宗族との衝突が発生した場合にも、後ろ盾があることによって有利な立場をとることが可能となった。とくに他姓の宗族に迫害された際に支援を得ることができた。つまり宗族は、宗族連合への参加が自分たちにとって有利だと判断して、自発的に宗族連合に参加したのである。そして、宗族連合の規模が大きくなっていったのであった。

広い地域に跨る、大規模な同姓宗族連合の形成過程において、共通の祖先の認定および祖先祭祀の実践は不可欠な要素となっている。共通の祖先とされた人物は、同姓ということだけで定められ、子孫との間の血縁関係は不明瞭であるが、いずれも知名度の高い歴史的人物である。同姓宗族間での共通の祖先に対する祭祀儀礼として、福建省南部地方では、主として複数の同姓宗族の間で祖先の肖像画を供養するという形を取っている。祖先祭祀儀礼は年一回秋に行われ、社会的に大きな意味を持っている。それは、同姓集団の団結を促すとともに、同姓集団の勢力や影響力を周囲に誇示するものでもある。

これまでの研究から、社会組織としての宗族を設立し維持していくために祖先祭祀儀礼の実践が重要であることが明らかになっている。宗族を基盤にした同姓宗族の連合においても同様に、祖先祭祀が統合機能を果たしていると考えられる。

宗族連合の規模および地域社会における知名度や影響力は、各姓で必ずしも同じではない。上述の林姓・李姓・洪姓の宗族連合は比較的規模の大きなものであるが、それ以外にも小規模なものも存在している。例えば、王姓・陳姓・邱姓・董楊姓などは、1949年以前に同姓宗族の連合を結成しており、祖先祭祀儀礼を行っていたが、その範囲や知名度はそれほど大きくなかった。

先に取り上げた事例のように、1949年以前の同姓団体のほとんどは、同姓宗族の連合体とし

て存在し、主として「迎祖」という祖先祭祀儀礼によって緩やかに結び付いたものであり、独自の運営組織を持つ組織体とは言えない。しかし民国期の1920年代から、一部の同姓宗族の連合は事務所を設置し、事業資金や資産、さらには「宗親会」という独自の運営組織を持つようになった。例えば、陳・胡・姚・田・虞という五姓の宗親会は1921年に晋江市安海鎮で（福建省晋江市虞舜学術研究会 2002: 20）、王姓宗親会は1931年3月に石獅で（石獅市王審知学術研究会 1998: 19）、洪姓を中心とする「六桂堂」宗親会は1940年代に晋江で（泉州六桂文史委員会 2005: 14）、柯・蔡という二姓による「済陽公所」という柯蔡宗親会は1945年頃に石獅で（潘 2002a: 254-255・2002b: 120）、事務所を伴って結成されている。各資料によると、それらの宗親会の結成は、地方の有名人だけではなく、華僑の呼びかけによって設立されたことが分かる。自律性のある運営組織を持つ宗親会の設立まで至るかどうかは、同姓一族の中に威信の高い、経済力を持つ発起者がいるかどうかによって決められると考えられる。

## 1.2 宗族の発達する地域社会の秩序と同姓団体の形成

福建省南部における同姓団体の形成は、この地域において宗族組織が発達してきたことと関係がある。

福建省南部地方における漢族の伝統的な社会組織としては、父系血縁集団である宗族組織が中核をなしていた（陳 1991; 鄭 1992; 潘 2002a）。宗族組織は地域社会の安定維持に大きな役割を果たしてきたが、一方で対立や抗争も生み出す原因となっていた。宗族間の利益が一致する場合、異なる姓氏の宗族であっても友好的に共存することができるが、一定の地域に集住している宗族共同体は自らの利益を守るため排他性を備えていることから、とくに宗族間の利益が一致しない場合に紛争になりやすい。時には械闘

のように武力を伴って対立することも少なくない<sup>5)</sup>。

そのような対立や抗争という力関係のなかで、これまでに考察してきたように、宗族は自らの利益を守り、勢力を増大するために、同姓関係を利用して他の同姓宗族との連帯関係を作り上げてきたのである。

このような社会的背景のもと、同姓団体は地域社会において一定の影響を持つ社会的結合として維持・運営され、以下のような社会的役割を果たしていた。

まず同姓宗族が連合を結成する動機として最も重要なのが、直接的には他姓の宗族による迫害、もしくは他姓宗族との間に械闘のような武力衝突が発生し、他の同姓宗族の支援を得ようとするものである。次に同姓宗族連合の結成には、同姓集団の勢力と団結を誇示しようとする意識が存在していることは言うまでもないが、それによって同姓集団の成員に心理上の安定感、安心感を与えようという意識がある。さらに同姓宗族の連合は、地域社会において社会的影響力を持つ組織として、同姓一族の利益を守りながらも、宗族内部・同姓宗族間・同姓宗族と他姓の宗族間の紛争を調停するという機能を持っている。しかも、同姓宗族の連合には同姓集団内の貧困者への経済支援を行っているところもある。

前近代の中国において、宗族は父系集団における成員間の団結・相互扶助・利益保護などを担っていた。これまで見てきたように、擬制的父系親族組織である同姓団体においても、宗族と同様の機能を果している。

以上のように、1949年以前の同姓団体の形成は宗族組織が発達している地域における社会的需要に応じてきたものであることは明らかであり、それが果していた役割についても考察してきた。

しかし潘の研究によると、1949年以前の福建省南部地方では、「宗族が発達するとともに、海外

華人華僑社会の宗親団体から影響により、宗親団体もかなり発達していた」として以下のような事例を挙げている（潘 2002b: 120）。

蔡姓の宗親団体は、1945年ころフィリピンの柯蔡宗親総会によって組織されたという。当時、晋江地区では、林姓宗族の林夢輝と蔡姓宗族の蔡鼎常を「国大代表」（国会議員）へ選出するために激しく争っていた。より多くの蔡姓宗親の票を集めるため、フィリピンの柯蔡宗親総会は石獅出身の華僑である蔡玉照を故郷に派遣し、「済陽柯蔡公所」という柯蔡の宗親団体を創設させた。その本部は石獅鎮新華街に設けられていた。宗親団体が設立されたため、圧倒的な人口を持つ蔡姓宗親はその票を蔡姓候補者に投じ、蔡姓の国会議員選出を実現したのである。1950年代以前、宗親団体は閩南の村落社会において重要な役割を果していた。

このように潘は1949年以前の福建省南部における宗親団体の発達について、「海外華人華僑社会の宗親団体からの影響を受けた」という外的要因を強調しながらも、「宗族が発達する」という内的要因を否定していない。この内的要因は、本論文で指摘してきた福建省南部における同姓団体の形成要因と一致しており、その背景の共通性を示している。そのため、今後、福建省南部の同姓団体の形成背景について、内的要因だけではなく、海外の華人華僑からの影響という外的要因についても考察していく必要がある。

しかし、民国期まで存在していた同姓団体は、1949年の中華人民共和国成立から1978年にかけての共産党政府による農村社会の全面的な再編のなかで、宗族組織と同様に、否定・批判されて、ほとんどの存在基盤を失って解体していたのである。

## 2. 1990年代以降の同姓団体の再興

### 2.1 同姓団体の復興

社会主義的政策によっていったん解体に至ったものの、1980年代以降、中央政府が農村社会の民間組織や民間信仰に対してかつての強硬な高圧的姿勢を放棄したことにより、1949年以前に存在していた同姓宗族間の連帯関係が再び強化され、宗親会の組織作りが盛んになった。林姓宗親会の設立はそのうちの一つである。

1990年、林姓宗族の長老たちがある宗族の祖先祭祀儀礼に参加した際、林姓一族の関係を強化するために林姓宗親会を設立することを提案した。その提案はすぐ皆に賛成された。

1991年、林姓宗親会準備委員会は晋江市政府に対して、宗親会を「宗親聯誼会」という名称で市レベルの社会团体として登録することを申請した。しかし、政府による認可を得ることはできず、宗親会として大規模な活動を実施することは困難になってしまった。

1993年6月、この宗親会は再度、「晋江市比干学術研究会」という名称での登録を申請した。およそ三ヶ月後、晋江市内務局は、「晋江市比干学術研究会」の名称で晋江市林姓宗親会の設立を許可し、晋江市の社会团体としての登録を認めた<sup>6)</sup>。

この時、宗親会の設立に中心的な役割を果たしたのは、印刷会社を経営する林芸（55才位）という人物である。林芸は、当時の状況についてこう語った。

政府の許可を得るために、私はいろいろと努力をした。当時、晋江市政府の役人のうち何人かは高校時代の友人であり、私はまず彼らとの個人的な関係を通じて宗親会の設立を申請した。政府役人からは、「学術研究会」のような名称であれば、宗親会の社会团体としての登録が許可されやすいと言われた。さらに、河南省衛輝市政府によって認可された宗親会組織である「中国比干学術研究会」から

ヒントを得て、「晋江市比干学術研究会」の名称で申請することにした。

また現在の中国政府は、台湾との関係強化や経済発展のため、海外華人・華僑を重視している。そこで私は、林姓宗親会の設立が海外華人・華僑との関係維持・強化に有益であると訴えた。それについても、とくに河南省衛輝市の例を挙げた。衛輝市は、市内にある全世界の林姓から「林家家廟」として認められた「比干廟」を利用し、中国比干学術研究会の設立を通じて林姓の華人・華僑との関係を作り上げ、彼らから数百万円の投資を誘致して、地域経済を発展させている。

このように私的ルートと公的ルートを通じて粘り強く努力した結果、およそ三ヶ月後、晋江市政府はやっと「晋江市比干学術研究会」の名称で、晋江市林姓宗親会の社会团体としての登録を認定してくれた。

晋江市の林姓の宗親は、1994年2月14日に晋江市林姓宗親会の設立祝賀大会を盛大に開催するために、およそ三ヶ月かけて周到な準備を行っていた。例えば、フィリピン、香港の林姓宗親会に「懇親団」を派遣し、直接式典の招待状を渡したり、地元である晋江市・泉州市・石獅市などの林姓の政府役人にも連絡をとって直接式典の招待状を渡したりしている。さらに宗親会の知名度を上げるため、マスコミの力を利用して、泉州・晋江・香港・フィリピンの新聞社にも式典の広告やニュースの掲載を依頼している。

祝賀大会当日には、約1000人の林姓の正式な代表が出席した。その内訳は、フィリピン・マレーシアなどの国および香港・マカオから参加した宗親が約40名で、中央・省・地・市政府の林姓の役人が約30名、福建省南部地方の林姓の企業家が約50人、そしてほかの林姓宗親が約900名となる。

これら1000人の招待状のある正式な代表のほか、福建省南部各地から林姓宗親が1万人ほど会

場に来ていたという。またこの式典には、福建省政協委員の林夢飛と台湾の世界林姓宗親総会の理事長から祝電が届けられている。晋江市林姓宗親会の設立に奔走してきた常務副会長の林芸は自慢気に「あれは林姓の史上最大規模の集会であった」と筆者に語った。

このように政府から社会団体の登録許可を得て設立したという事例は、周辺のエ姓にも影響を及ぼしている。1994年から1995年にかけて、南安市と石獅市の林姓宗親は、同様に「比干学術研究会」の名称で、それぞれの市民政局に宗親会の社会団体としての登録を申請して許可を得た。そして、現在、福建省南部地方には、政府に正式に認められている林姓宗親会が三つあり、いずれも「比干学術研究会」の名称で登録されている。

この地域にはこれら以外にも、多くの宗親会が存在している。筆者が長期調査を終えた2005年の時点で、福建省南部の石獅市・晋江市・南安市・泉州市の市民政局に「某遠祖の学術研究会」の名称で社会団体として登録された宗親会は14団体にもなる。これらの宗親会は、政府に認められたことから、いずれも晋江市林姓宗親会と同じように宗親会の設立祝賀大会を盛大に開催している。そのほかにも、実際に宗親活動を行っているが、社会団体の資格を得ていない宗親会が十数団体あり、郭姓宗親会・戴姓宗親会などが挙げられる。また一部には、1949年以前にすでに存在していて1990年代以降に復活されたものもある。柯蔡宗親会・王姓宗親会・洪姓宗親会などはそれに当たる。そのほかにも、戴姓宗親会のように1990年代になって新しく結成されたものもある。

## 2.2 同姓団体の組織構成

宗親会は、地域社会での影響力を確立・拡大するために、可能な限り宗族の数を増やそうとして、地域内にいるすべての同姓宗族を加入させようとする。例えば、晋江市林姓宗親会は市

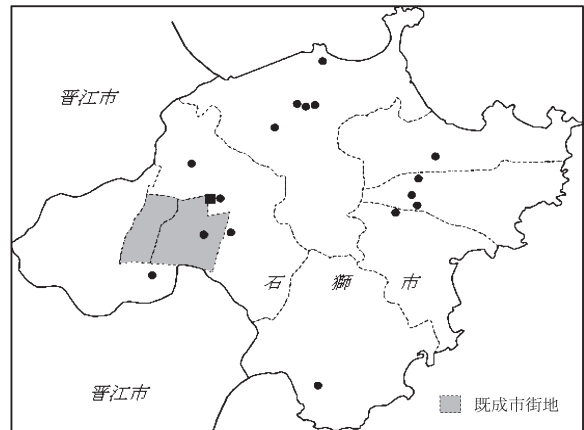


図2 石獅市における林姓の宗族の村落分布図 (■は石獅市林姓宗親会の所在地を現し、●は林姓の宗族の村落所在地を現す)

内に分布する14の林姓宗族を取り込む形で結成された。石獅市林姓宗親会は市内に分布する7つの林姓宗族すべてを取り込んでいる(7つの林姓宗族の総人口は約2万人)。石獅市における林姓の宗族村落の分布をまとめると図2のようになる<sup>8)</sup>。

1990年代以降の多くの宗親会は、1949年以前の同姓宗族の連合を復活させたものであるが、組織の定款・選挙を通して選出された指導層・事務部門・事務所・活動資金といった組織的要素を持つようになり、本格的な組織体へと発展しているものである。

石獅市林姓宗親会は、他の宗親会と同様、「石獅市比干学術研究会章程」という詳細な定款を定めている。1998年に定められた定款は三章14条から構成されており、組織の目的・機構・資金の調達方法などが定められている。この定款は、伝統的な宗親観念および様式に基づきながらも、社会的・政治的状況に適応した宗親会の現代的様相をよく表したものである。

任意加入の社会団体としての宗親会は、その維持と展開に指導者の財的・人的支援が欠かせないものであり、指導者の存在が重要となる。複数の同姓宗族という「集団成員」から構成された福建省南部の宗親会において、その指導層は各宗族の推薦した代表者から構成されており、



宗親会の選挙を通して選出される。

指導層には、事務職、監督・顧問職、名誉職という三つのタイプの役職が設置されている。事務職は、会長・常務副会長・副会長・秘書長・副秘書長・常務理事という役員からなり、宗親会の日常運営を担当している。監督・顧問職は、監委・顧問の役員からなり、宗親会の日常的業務には関与しないが、運営の監督や顧問の役割を果たす。さらに、組織の勢力を示し、社会的影響力を拡大し、社会の中での基盤を固めるため、名誉会長や名誉顧問を含む名誉職を設置している。

宗親会には、それぞれの役割を担う事務部門が設置され、上記の事務役員を各事務部門に配属して宗親会を運営している。例えば、石獅市林姓宗親会には宗親組・学術研究組・青年組という三つの事務部門があり、それぞれ役割は明確に分かれている。宗親組の役割は、政府や各村落と協力して宗族内部・同姓宗族間・同姓宗族と他姓の宗族間の紛争を調停したり、生活困窮者や大学生を援助したり、同姓集団の和睦を促進したりすることである。学術研究組は共通の遠祖である比干に関する文献資料や林姓一族の系譜、同族の著名人に関する資料を収集し、保存する。青年組は同姓の若手ビジネスマンの参加を促し、その関係を強化することを任務とする。

これら石獅市林姓宗親会の三部門の役割から、現在の宗親会の組織としての機能が明らかとなる。まず、1949年以前と同様、現在の宗親会は、宗族内部と宗族間に起こった紛争の調停や同姓集団の貧困者や学生への経済支援といった伝統的な役割を果たしている。一方で現在の宗親会には、学術研究と同姓者間の経済交流促進という新しい役割が現れるようになった。学術研究は、同姓集団における連帯意識の強化を目的とするものであり、政府からの認定を得られたものである。それに対して、同姓者の経済交流促進は、市場経済化のもとで現れた新しい役割で

ある。さらに、これら事務部門の設置に反映されていないが、宗親会の組織化の根底には、同姓集団の勢力と団結を誇示しようとする意識が存在することは言うまでもない。それによって、宗親会は、地域社会において、同姓一族の成員に心理上の安定感、安心感を与えるという役割をも果たしているのである。

宗親会の学生への経済支援は、授与対象が集団成員である宗族を単位に推薦され、同姓一族に限られている。その主な対象は大学生である。中国の宗族が一族から科挙合格者を輩出することを重視したように、宗親会も教育支援を重視し、人材育成を行っているのである。その最大の目的は、同姓集団の求心力や連帯意識を高めることにある。

宗親会の多くは成員たちを召集するビルを所有しており、日常的会合や年度大会などがそこで行われている。例えば、石獅市林姓宗親会は5階建てで総面積2,000平方メートル規模のビルを所有しており、宗親会の事務所をその2階に設置している(写真1)。晋江市林姓宗親会は5階建て、南安林姓宗親会は3階建て、石獅市王姓宗親会は2階建て、泉州六桂堂宗親会や石獅市邱姓宗親会は3階建てのビルを所有している。

宗親会のビルは、構成メンバーである同姓宗



写真1 石獅市林姓宗親会のビル (2005年同宗親会提供)

族によって建てられた共有財産である。このような建築物は、財政基盤が堅固であるということを外部に示すことができ、同姓一族の勢力の誇示するだけでなく、同姓集団の成員および子孫に共有財産を受け継がせ、繁栄し、拡大していった欲しいという意識も存在している。

また、組織としての宗親会には運営資金が必要である。宗親会はビルの一部を事務所として使用しているが、残りの部分を賃貸している。その収益は運営費として用いられると同時に、同姓集団の貧困者や大学生を対象とした経済支援の基金となっている。

前近代の中国において、族田とは宗族の運営と祖先祭祀を支えた経済的基盤であり、族田の収益は年度の祖先祭祀や族人子弟の教育費、族人の貧困者の生活保護基金として活用された。上述の宗親会における共有財産の設置、財産を巡る意識、収益の活用方法は、宗族における族田のような役割を果たしていることは明らかである。

宗親会は、集団としての結束力を強化するために、通常年に数回、宗親会全体で年度行事を行う。石獅市林姓宗親会の場合、年1回の理事大会と年2回の祖先祭祀儀礼がある。

年1回の理事大会は、1月5日に宗親会の建物の5階にある会場で行われる。参加者はすべての事務役員である。理事大会では、事務役員の代表である会長や秘書長は、他の役員に前年度の宗親会の運営状況や資金収支などを報告し、来年度の計画を提出する。年1回の理事大会は、各宗族を代表する理事や役員との親睦と協力を促進すること、各宗族に対する宗親会の発言力や指導力を高めることなどを主旨とする。

祖先祭祀儀礼としては、室外での祖先の肖像画を供養するという伝統的な「迎祖」儀礼だけでなく、特定の施設内で祖先の塑像を供養するという儀礼も行われるようになった。祖先祭祀儀礼は、年2回に、春と秋に行われる。儀礼の主催者と参加者は事務役員である。役員たちは祭祀用の供え物などを用意し、祖先の肖像画や

祖先の塑像の前で線香をあげ、跪いて祭文を読み、祖先祭祀を行う。儀礼は荘厳な雰囲気の中で1時間以上も続く。儀礼の後、宗親会は祖先祭祀の施設内で宴会を開き、祭祀儀礼に出席した役員たちを招待する。祭祀儀礼を行う目的は、各宗族を代表する役員間の親睦と協力の促進をはかるところにあり、同姓一族の結束が目指されている。また、祭祀儀礼の後の宴会も、同様の目的で必ず開催される。

つまり、1949年以前の同姓団体と同様、現在の同姓団体においても祖先祭祀が統合的機能を果たしていることは変わらない。

このように、現在の同姓団体は同姓一族の成員団結や相互扶助、利益保護という機能を果たしており、1949年以前の同姓団体との連続性は明白である。

## 2.3 社会変動と同姓団体の再興動向

### 2.3.1 宗族の復興と同姓団体

1980年代以降、中央政府が農村社会の民間組織や民間信仰に対するかつての強硬な高圧的姿勢を放棄したことにより、中国大陸の各地域において民間信仰や宗族組織の復興がよく見られた（聶 1992; 郭 1994; 石田 1995; 銭・謝 1995; Han 1995、2001; 潘 2002a; 阮 2005; 秦 2005; 韓 2007）。とくに、福建省南部の農村においては、中国の他地域では見られないほど急速に数多くの宗族が再興されたことが知られている（潘 2002a）。こうした宗族の再興という社会的背景のなかで、各宗族の勢力が増大したことにより、村落や宗族間の競争が激しくなり、紛争も多発している。宗族は自らの利益を守り、勢力を増すために、1949年以前に地域社会に存在していた同姓団体の伝統を復活させたのである。石獅市林姓宗親会はその典型的な事例である。

石獅市の市街地に暮らす林姓の人々は、石獅市林姓宗親会の設立の発起人であった。石獅市の市街地の林姓はおよそ1200人ほどであり、彼らは主として石獅市周辺の農村と省内他市から移

住してきた人たちである。

石獅はもともと晋江市下の「鎮」<sup>9)</sup>であった。1978年の改革開放以降、地元の人々は海外の親戚から提供された資金や情報を活用して衣料品加工を始め、地方経済の発展を成し遂げた。そのため1980年代には、石獅は国内でも有数の大規模衣料品加工基地として急成長すると同時に、全国にも名を馳せる大規模な衣服おろし市場を形成することができたのである。一方で、このような急速な発展は大勢の移住者をもたらした。周辺の農村、福建省内他地域から大勢の人々がこの鎮にやって来たが、林姓の移住者はその中の一部であった。その後、商業生産量や非農業人口の増加のため、石獅鎮は1987年12月に石獅市へと昇格された。

急速に都市化された石獅市は、外観は大都市のように見えるが、もともと市街地の大部分が村落社会であったため、農村社会の強い宗族観念が色濃く残っている。宗族組織が発達し、宗族観念が強い福建省南部では、強大な宗族組織という後ろ楯がない人々は不利な扱いを受けることが多い。新しい移住者であり地元の宗族集団との関わりが少ない市街地の林姓が、つねに弱い立場に立たされるのはそのためである。したがって、市街地内の林姓は、互いに明確な血縁関係がないにも関わらず、自分たちの勢力を強めるために1982年に「忠孝堂」という父系親族集団を組織し、共通の祖先である比干を対象とした祖先祭祀儀礼を行い、共有資金資産を設けた。明確な血縁関係を持たない「忠孝堂」組織は、同姓団体というべきものであり、宗族とは言えない。しかし石獅市林姓宗親会設立に際して、市街地の林姓の人々が自らの「忠孝堂」組織を宗親会の下位にあたる「宗族」と主張し、地元の他の林姓の宗族もまた「忠孝堂」組織を「宗族」と見なしている。明確な血縁関係を持たない市街地の林姓の人々が個人ではなく「宗族」を通して宗親会に関与することと、「忠孝堂」組織が他の林姓の宗族から「宗族」とし

て見なされていることから、宗族組織が発達する福建省南部では、個人ではなく、宗族こそが宗親会を構成する成員であるという慣習や意識が存在しているように解釈できる。そのため本論文では、便宜的に市街地の林姓による「忠孝堂」組織を「宗族」と呼ぶ。

市街地の林姓がつねに弱い立場に立たされていることは、交通事故の賠償金の金額によく現れている。福建省南部では、交通事故の解決は交通関係機関に任せられるが、民間による仲裁も補助的手段として存在する。一般的に死傷者が出るほどの交通事故の場合、賠償金として10～13万元程度が支払われる。しかし弱小な宗族に死傷者が出た場合、民間による仲裁がうまく調停できなければ、通常の賠償金の半額程度しか支払われないのである。市街地に暮らす林姓は全体の人数が少ないため、つねに不利な立場にあり、交通事故などで支払われる賠償金はつねに少なかった。「交通事故に遭っても、われわれは小額の賠償金しかもらえないことがたびたびあったため、自身の立場の弱さを痛感した」と市街地の林姓の役員は語った。

市街地に暮らす林姓がとくに脅威と感じているのは同じ市街地内に住む蔡姓の人々の存在である。石獅市には10万人あまりの蔡姓の人々が居住しており、宗族勢力の最も強い「大姓」と見なされている。市街地に暮らす蔡姓は7千人近くおり、市街地の林姓の6倍強にもなる。石獅では林姓と蔡姓は犬猿の仲で、歴史上、何度も械闘が発生している。なかでも清代末期に発生した械闘は大規模なもので、18年間も続いた。当時、石獅における両姓のほぼすべての宗族村はこの械闘に巻き込まれた。これをきっかけとして両姓は対抗意識を持つようになり、今でもその意識が残っている。現在、両姓の間で何か問題が発生すると、容易に喧嘩になってしまう。問題が発生しなくても、対抗意識はつねに潜んでいる。とくに市街地においては林姓と蔡姓の人口には大差があるため、何らかの不和が生じた場

合、林姓は我慢するしかない。また、不和が生じなくても、林姓は蔡姓からの精神的なプレッシャーをつねに感じているという。

1993年に市街地に暮らす蔡姓が柯蔡宗親会を設立しようとしたことは、市街地の林姓の人々に大きなプレッシャーを与えた。蔡姓の人々が何度も予備会議を開くことに対して、市街地の林姓はかなり不安を感じていた。柯蔡宗親会が成立したら、市街地における蔡姓の勢力はより強くなり、林姓に今までに大きな精神的プレッシャーを与えるに違いないと市街地の林姓は思ったのである。市街地の林姓は自らの勢力を強めるため、他の林姓宗族との連帯関係を強化しなければならないと考えた。このような理由から、彼らは石獅市林姓宗親会の設立を呼びかけ、林姓宗親会の設立を積極的に推進したのである。

宗族勢力が大きくものをいう福建省南部地方では、宗親会の設立には強力な宗族の支持と参加が欠かせない。石獅市において、人口5800人余りの蓮宗族が、人口の多いことと結束力の高いことで、石獅市の林姓宗族の中で最も強力な宗族とされる。他の林姓宗族は、蓮宗族の影響力を認めており、つねに蓮宗族の意見を尊重している。そのため市街地に暮らす林姓は、石獅市林姓宗親会の設立を計画する初期段階において、蓮宗族と積極的に連絡を取り合い、彼らの支持や参与を求めた。

市街地の林姓「宗族」の代表は、蓮宗族の長老と何度も会談し、林姓宗親会の設立の重要性を強調した。彼らは、石獅の林姓が宗親会を作らなければ、蔡姓に負け、林姓の地位や影響力が低下する恐れがあると訴えた。蓮宗族の長老たちは彼らの訴えに共感をおぼえた。福建省南部地方では、宗親会の存在は一族の勢力の誇示とみなされているので、林姓が宗親会を持たなければ、団結力や実力に乏しく、蔡姓に負けているとされてしまうのである。蓮宗族の人々にとって蔡姓に負けていると感じることは受け入

れがたいものであった。

前述の18年間も続いた石獅における林姓と蔡姓との械闘は、実は蓮宗族に起因している。この械闘には勝負はつかなかったが、蓮宗族および林姓一族は械闘を通して自分たちの強さを示し、地域社会における高い威信と地位を確立した。このような歴史的背景と社会状況の中で、蓮宗族は自分の宗族および林姓一族の地位や威信を維持、あるいは再確立するために、積極的に宗親会の設立に関与し始めた。例えば、蓮宗族の長老たちは蓮宗族内で宗親会設立の予備会議を何度も主催し、蓮宗族出身の林徳生を宗親会の一番重要な職務である会長に就任させたのである。このことは、宗親会にとって、強大な蓮宗族が宗親会の中核となることを意味している。

このような経緯を経て設立された石獅市林姓宗親会は、地域社会での影響力を確立・拡大するため、できるだけ会員数を増加させ、全ての同姓の宗族を勧誘して加入させようとした。林姓の宗族には蔡姓との対抗意識があることから、自らの宗族の地位を高めるためにも、宗親会への参加を拒否する宗族はいなかった。このようにして、石獅市のすべての林姓宗族を包括するような石獅市林姓宗親会が形成された。すなわち、宗族は、宗親会への参加が自分たちにとって有用であることから参加を決定したのである。このようにして、次第に宗親会の規模が大きくなっていった。

石獅市林姓宗親会のように、弱小な「宗族」が宗親会の設立を呼びかけ、強大な宗族が宗親会の支柱になるという現象は、他の宗親会にもよく見られるものである。例えば、晋江市林姓宗親会の設立は、金井鎮にある林姓の宗族によって呼びかけられた。その宗族はわずか数百人足らずで、地元では弱小な宗族と見なされている。人口が少ないため、周辺の人口の多い宗族の圧迫を受けていた。自らの勢力を強めるために宗親会の設立を呼びかけた金井鎮の林姓の宗族は、

まず晋江市で最も強力な林姓の坪宗族と連絡して彼らの支持や参与を求め、坪宗族出身の林時を宗親会会長に就任させた。また晋江市陳姓宗親会は、罹山鎮の陳姓宗族の呼びかけによって成立したが、その宗族は1千人ほどの弱小な宗族とされ、自らの勢力を強めるために宗親会の設立を呼びかけた。彼らも晋江市で最も宗族勢力の強い陳姓の祥宗族に支持と参加を求め、祥宗族出身の陳某を宗親会会長に就任させた。

弱小宗族が積極的に宗親会を發起する理由としては、宗族が弱いため、宗親会に依存する必要性が大きいところにある。強い宗族が宗親会の成立に積極的に関与する理由は、自らの威信や勢力を維持するところにあると言える。

さらに上記の事例から、この地域に残っている林姓と蔡姓の対抗意識が石獅市林姓宗親会設立の外的推進力となったことがわかる。同様なことは、他の宗親会の成立にも見られる。例えば王姓と邱姓の間には、1949年以前に数年間に渡る武力衝突があったことから、現在も対抗意識が残っている。そのため石獅市王姓宗親会が設立された後、王姓に負けなように、邱姓が石獅市邱姓宗親会の創設を図ったのである。この地域に長年にわたって形成された姓氏間の対立や対抗の関係・意識は、現在でも宗族間の付き合いのあり方に影響を与え、宗親会が次々と結成される原因の一つとなっていると言える。

上述のように、現在の福建省南部の宗親会は、1949年以前と同様、宗族社会に根付き、宗族の社会的需要に応じてできた産物であり、今日の社会環境のなかで宗族が復興された結果であると言える。

1990年代以降、福建省南部では宗親会の発展が見られるようになったが、宗親会についての詳細かつ実証的な研究はほとんどなされていない。この中で唯一特筆すべきは、潘宏立による石獅市柯蔡宗親会に関する研究である。潘は、福建省南部の宗族組織に関する研究において、石獅市柯蔡宗親会の復活に注目している。

まず、宗親会と宗族の関係について、潘は「この地区の214の蔡姓、柯姓同姓村をすべて包含しており、晋江・石獅地域における厳密な宗親会のネットワークを構築した」と指摘している(潘 2002b: 121)。福建省南部の宗親会が同姓宗族の連合体として存在しているという本論文の視点は、潘の事例からも確認することができる。

しかし宗親会の規模から見ると、石獅市柯蔡宗親会のような巨大な組織は、それほど存在していない。本論文で取り上げている石獅市林姓宗親会や晋江市林姓宗親会・南安市林姓宗親会・晋江市陳姓宗親会・石獅市邱姓宗親会などは、いずれも十数の宗族によって構成され、その姓にあたる人口が数万人規模である。それに対して石獅市には、10万人あまりの蔡姓が暮らしており、最も宗族勢力の強い「大姓」と見なされている。柯蔡宗親会は214の蔡姓・柯姓村から構成されており、この地域において最大の宗親会となっている。したがって宗親会の規模から言うと、本論文で考察している石獅市林姓宗親会や晋江市林姓宗親会・南安市林姓宗親会・晋江市陳姓宗親会・石獅市邱姓宗親会などのような中型の宗親会からは、この地域の宗親会の共通性を見出すことができると考える。

また石獅市柯蔡宗親会は「海外の宗親団体と同様、同族の利益を最大限に守ることが目的である」とされている(潘 2002b: 129)。この点においては本論文で考察してきた宗親会の役割と合致している。

さらに潘は、1990年代以降、福建省南部における宗親会復興の理由について、海外華人・華僑から政治的・経済的支援を受けた結果であることを強調している(潘 2002b: 117-144)。これまでのところ本論文では、宗親会復興の理由について、今日の社会環境のなかで宗族が復興された結果であるという内的要因を強調してきた。今後、海外華人・華僑からの影響という外的要因に関する考察を進めていく必要がある。

### 2.3.2 市場経済発展と同姓団体

これまで文化人類学や社会学では、伝統の復興、社会流動、人口移住、都市化、商業化といった側面から1980年代以降の中国社会の変動を把握してきた。商業化と経済発展の展開は、社会の各分野に大きな影響を与えていることは明らかである。顕著な現象として、経済活動において経済利益を巡る競争が激化し、人々は社会的地位を向上させたり、より多くの財富の獲得をはかるために努力する以外に、同郷会・同窓会・同業協会といった社会資源をうまく開発し利用する必要が出てきている。本論文で扱う父系親族関係もそのうちの一つである。

現在の商業化と人口の流動化が進展するとともに、宗族村落のような狭い生活圏を遠く離れ、市鎮やより大きな地理的範囲において経済活動を営む福建省南部地域の人々は、競争社会に対応するため、基本的な社会関係である父系親族関係から出発し、宗親会を作り上げ、同姓の社会的ネットワークを利用している。それは、宗親会の指導者の構成からも伺える。石獅市林姓宗親会には、設立の1994年から2005年まで、会長・副会長・秘書長という指導的役職に63人が就任している。そのうち村・鎮行政の役人が21人、地方の文化人が10人いるほか、商人・経営者が32人いる。彼らは企業やレストランなどを経営しており、宗親会への加入によって社会・経済地位の上昇やビジネスチャンスの拡大を図っていることは下記の事例から明らかである。

#### ① 同姓団体の役員同士のビジネスネットワーク

宗親会役員は、宗親会を通して、役員相互のビジネスチャンスを広げている。

#### 事例1：

石獅市林姓宗親会が設立されたばかりの1994年に、会長の林国は、他の4人の副会長とともに、35万元ほどの資金を集めて「基金会」を設立した。銀行より高い利息を設定し、他の私営会社に貸

し出すことによって利益を得た。<sup>10)</sup>

#### 事例2：

石獅市林姓宗親会副会長の林順は、1997年から1999年までレストランを経営していた。その間、彼は宗親会を通してより多くの林姓商人と知り合い、「友人を招待するときに、必ずうちのレストランに連れてきてほしい」と頼んでレストランの客を増やした。

#### 事例3：

石獅市林姓宗親会の役員が大量に靴を購入する必要がある場合、つねに靴会社を経営する会長の林国や名誉会長の林平から購入している。また布を購入する場合には、製布会社を経営する名誉会長の林志から購入している。

石材販売に従事している晋江市林姓宗親会会長の林時は、「宗親会の会長になってから、私はこの市のほぼすべての林姓商人を訪問し、自分の会社の石材商品を紹介した。それ以来彼らは、会社建物の建設や家の内装工事をする際、いつも私の会社から石材を買っている」と語る。

印刷業を営んでいる晋江市林姓宗親会常務副会長の林芸は、「常務会長となってから、私は当市のほぼすべての林姓商人を訪問し、自分の印刷会社の業務を紹介してきた。宣伝用の資料や広告を作る際、私にやらせてくれと頼んだ。訪問回数を重ねるほど商売のチャンスを手にする可能性が高くなる」と言う。

以上の事例について、なぜ同姓者の店や会社の商品を選ぶのかについて、筆者は林姓宗親会の役員に尋ねた。すると、「他の会社から買うより、同姓者の会社から買ったほうが、信頼もあるし、互いに利益を得ることができる。だから、いつも同姓者の会社のものを選んでいく」と教えられた。このような理由から、同姓同士の店や会社の商売は増えるのは明らかである。

次に、宗親会の役員たちは宗親会を通して、経済活動を有利にする人脈を構築している。その事例を次に提示する。

#### 事例4：

石宗族村の林Fと長宗族村の林Gは、石獅市林姓宗親会の常務理事である。

この二人は一緒に商売をしていたが、金銭問題で揉めたため、2004年に林Fが林Gに訴えられた。その起訴は裁判所によって受理された。しかしその後、二人は話し合いで決着をつけ、裁判所の訴訟を取り消そうとした。訴訟の取り消しには複雑な手続きが必要である。まず、裁判所に訴訟を取り消すことを申し出、裁判所はそれを審理した上で決定する。もし裁判所が取り消すことができないと判定した場合、審理をさらに続けなければならないため時間もかかる。これは林Fにとって望ましくないことであった。林Fは、個人的なコネを通して、訴訟の取り消しを早く済ませたかった。

石獅市林姓宗親会の役員の中に林Hという人物がいる。林Hは、地元でも有数の靴会社の会長であり、地元政府の役人や裁判所副裁判長と仲が良い。林Fはそれを知り、林Hにこの問題の解決を頼もうと考えた。

しかし先に述べたように、林Hは地元でも有数の靴会社の会長であり、一般人には彼と会うことさえ難しい。そこで林Fは、林Hと深い親交をもつ石獅市林姓宗親会会長の林国に助けを求めた。

会長の林国は林Fを連れて林Hを訪ね、事情を語ったうえで林Hの助けを求めた。林Hは、その場ですぐに裁判所の副裁判長に電話をかけ、その訴訟を取り消すことを頼んだ。すると、このことはうまく解決できた。

後に林Fは、林Hにお礼として「世紀新人・宗親有望」（同姓親族は新しい時代にも頼れるものであるという意味）という錦旗を送った。

#### 事例5：

2000年、石獅市林姓宗親会副会長の林色は、北京で金銭問題による訴訟に巻き込まれた。彼は、北京にはまったくコネがなかったが、会長である林国の友人が北京にいることを知り、林国に助けを求めた。

会長の林国は、北京のある高官と連絡を取った。その高官は林色の助けになる人間を何名も紹介してくれた。簡単に解決できない複雑な事件だったので、北京にまったくコネのない林色にとっては非常に助かるものであった。

#### 事例6：

晋江市林姓宗親会の会長の林時は、「私は、宗親会の会長となってから、晋江市のほぼすべての林姓商人と知り合いになった。現在、私は毎月必ずそれらの商人と会食している。彼らは皆それぞれの人脈を持っているので、彼らとの親交を深めることで、経済活動で困ったことがあれば、彼らの人脈を利用して解決できる」と語る。

### ② 同姓団体以外のビジネスチャンスの拡大

地域社会における民間組織にとって、自らの知名度や影響力を高めるには、地方の名士による会長への就任が欠かせない。福建省南部地域においては、民間組織であるものの政府に社会団体として認められた宗親会の会長や常任副会長は、「民間における権威」と「政府の権威」を併せ持ったもので、地域社会において社会的地位や影響力の強い人間であると見なされている。多くの民間組織は、宗親会の会長や常任副会長に自分たちの組織の会長に就任してもらうことによって、その社会的地位や影響力を高めることができる。そのため、宗親会の会長や常任副会長は、つねに他の民間組織の会長への就任を要請されている。そして彼らは、他の民間組織の会長就任を通して、自らのビジネスチャンスがより一層増えることになる。

#### 事例7：

晋江市林姓宗親会の常任副会長の林芸は、2003年に「晋江市媽祖会」会長、2005年「晋江市道教研究会」会長への就任要請を受け入れ、就任した。

筆者が「晋江市媽祖会」と「晋江市道教研究会」の会長就任に応じた理由について林芸に尋ねたところ、意外にも意図を隠さずに以下のように教えられた。「この二つの民間組織は中国本土および海外の華人・華僑社会における同様の組織との往来が頻繁であることから、多数の宣伝用チラシが必要となる。私は印刷業をやっているので、この二つの組織の会長になれば当然印刷のビジネスチャンスが手に入る。」

ただし、宗親会の指導者は、すべての民間組織の会長への就任要請を受けるわけではない。むしろ自らの経済的利益を配慮したうえで、就任要請に応じるのである。次の事例は、そのことを示している。

#### 事例8：

晋江市林姓宗親会会長の林時は、「私もいろいろな民間組織の会長就任を依頼された。晋江市媽祖会と晋江市道教研究会はその内の二つだが、私はそれらを断り、私の出身鎮にある『榮林鎮企業家協会』会長就任の誘いだけに応じた」と語った。

林時がなぜ「榮林鎮企業家協会」の会長就任だけに応じたかについて、他の林姓の商人に聞いたところ、「林時は石材で商売している。彼にとっては、晋江市媽祖会と晋江市道教研究会のような民間組織の会長に就任しても経済的利益にはならない。だが、榮林鎮商人協会の会長になると、より多くの商人と知り合い、石材のビジネスチャンスがより多く得られるんだよ」と教えられた。

#### ③ 同姓団体会長への金融機関からの融資

現在、福建省南部の一部の宗親会は政府に認められた社会団体となっており、そのことによって、宗親会の役員は政府の権威を持つ存在でもあると見なされている。宗親会会長ともなると、地域社会においても信用の高い人間と見なされ、銀行のような金融機関とやりとりする際に役に立つのである。このことは、宗親会の会長が他の人より大口の融資を受けやすいという点に現れている。

#### 事例9：

2000年以降、石獅市林姓宗親会会長の林国は、自分の企業を多角的に展開させ、元々の靴メーカーと運送業から染物産業・不動産業まで手を広げた。その際、彼は銀行から融資を受けて、100万元近くの資金を手に入れた。

晋江市林姓宗親会会長の林時も、2000年から石材会社の規模を拡大している。彼は銀行から50万元近くの資金を借り入れている。

中国社会では、個人の社会的信用が重んじられている。信用されている人間は、他の人よりも銀行から融資を受けやすい。

政府機関における地位は個人の社会的信用につながっている。例えば、公務員は信用できる人間と考えられ、銀行から10万元を借り入れることができる。公務員は昇進するにつれて銀行から受けられる融資の金額も増える。国家機関の科長級であれば20万元、処級なら30万元、庁級なら50万元を借り入れることができるという具合である。

福建省南部において、国家機関の職務ではないものの、宗親会の会長という地位はそれに等しい社会的信用を持つものと見なされている。宗親会の会長は、資産を持つ一般の商人より信用のある人間と見なされることから、銀行から比較的簡単に大口の融資を受けられるのである。



1978年の改革開放以降の経済発展のもとで、家族・宗族といった父系親族関係が経済的活動に利用されていることは、すでに多くの指摘がある (Huang 1989; 郭 1994; 石田 1995; Han 1995, 2001; 韓 2007; 陳 2000)。しかし、宗親会によって成立した父系親族のネットワークの範囲は家族や宗族より大きく、その社会的資源も家族や宗族より優れていることから、利用しやすい社会的資源へと変わっていくところもあると言える。これまで考察してきたように、人々は宗親会を通じて自らの経済的活動を有利に展開している。そのため人々は宗親会の再興を積極的に促していると考えられる。

#### 2.4 民間主導・政府介入の同姓団体の復活

1990年代以降の福建省南部の宗親会は、宗族の主導によって結成され、成員や活動資金はすべて宗族を単位としており、同姓一族の利益を代弁するものである。すなわち、1949年以前と同様に、1990年代以降のこの地域における宗親会は、依然として民間レベルでの活動に留まっている。しかし以前とは異なり、宗親会は新中国成立後、初の社会団体として、「某遠祖の学術研究会」の名称で政府に間接的に認められているのである。

1980年代から共産党政府は経済開放の政策を取り始めた。経済開放にともなう政府の重要な方針の一つが、華人・華僑資本の利用であった。中国の商務部（経済産業省にあたる）の統計によると、1978年から2005年までの28年間、中国は合計6224億米ドルの外資を利用している。そのうちの67%、4170億米ドルは海外の華人・華僑や香港・台湾からの投資であり<sup>11)</sup>、それらが中国社会の経済発展を推進していると言える。同時に、政治面からみれば、台湾との政治的衝突を緩和するために、国家は政府間の交流ルート強化するほかに民間の交流ルートも必要としている。

長い移民の歴史がある中国大陸と海外の華人・

華僑社会、香港・台湾社会との間には、国境を越えた地縁や血縁、神縁などの歴史的・文化的つながりがある。同姓同士には血縁関係があるということは、それらの地域に共通する社会理念であることから、宗親会はこれらの地域で存続し、広く分布している<sup>12)</sup>。すなわち、宗親会によってできた国際交流のルートは、政府や民間にとって、広大な地域に跨がる、歴史・文化的正統性を持つものであると言える。中国大陸における宗親会は、海外の華人・華僑や香港・台湾の社会との関係強化と、国家の政治・経済的発展戦略の実現に有益であると、政府から期待されているように考えられる。

このような国家の利益を配慮したうえで、政府は1990年代以降、民間組織の宗親会の活発な動きに対して、かつての宗親会を非難、消滅させようとしてきた政策を変更して、寛容な政策を採るようになってきている。筆者が現地調査を終えた2005年6月の時点までに、福建省南部地域では、地方政府は民間の伝統文化研究を支援する立場から、40団体のうちの14団体の宗親会に「某遠祖の学術研究会」という名称で、社会団体の資格を賦与している。しかしそれと同時に、ローカルな宗族の主導により作り上げられ、同姓一族の利益保護というような社会的役割を果たしている宗親会には、社会主義国家の社会秩序の建設に相応しくない要素があると見なされ、政府による制限的管理が行われている。具体的には、文化政策の面から、国家が祖先崇拜という伝統を評価しながらも、祖先崇拜の持つ「孝」という儒教的文化的イデオロギーの要素を抹消した解釈を行っていることが挙げられる。行政政策の面においては、地方政府は「某遠祖の学術研究会」という名称で一部の宗親会を社会団体として婉曲的に認めると同時に、同姓団体の規模や社会団体の資格認定、社会的役割に対して制限する政策も行っている。しかも政府は、二重の行政管理制度や役員個人まで至る行政上や法律上の管理、年間審査といった行政管理の

系統化を通じて、宗親会に対する影響力・支配力を強化しようとしている。とくに宗親会の役員が個人レベルで政府管理のもとに取り入れられたことは、政府が宗親会の役員を通じて政府当局の意図を反映させることを期待しているように見える。さらに宗親会の組織活動において、社会秩序の建設に悪い影響をもたらすものがあると思われたら、政府は役員個人にまで責任を追及する可能性があることをも示唆している。

つまり、1990年代以降、同姓団体の受け皿となる政府政策が、大きく変化しているということからは、同姓団体の復興と言っても、1949年以前の伝統的な同姓団体がそのままの形で蘇るということではない。新しい政府政策のもとで、同姓団体は、民間組織としての「自治」が維持されながらも、様々な変容がやむを得ない。とくに、同姓団体の役員たちは、政府の宗親会の政策を了解したうえで、自分たちの宗親会の組織としての活動の実施を余儀なくされた。今後の課題としては、政府の政策に対応して、同姓団体が自らの組織活動をどのように実施しているのかを具体的に検証する必要がある。この点については、別稿で論じることにはしたい。

## 2.5 考察

1990年代以降の同姓団体の再興に関する考察を通して、1949年以前と変わらず、宗族を基盤にした同姓団体は、宗族と同様に祖先祭祀が統合機能を果たしていること、父系親族集団の団結・相互扶助・利益保護などのような機能を果たしていることが明らかになった。そこでは、かつての習慣的な関係である宗族が拡大発展した同姓団体が存在することも明らかにしている。すなわち、1980年代以降に進められた改革開放政策のもとで、社会主義革命時代に禁止・隠蔽されてきた伝統的な同姓結合が再び表面化してきた。現在に生き続ける同姓団体の伝統の基本は、近世期に形成され、その伝統を継承・展開したものである。父系血縁の結合が、今まさ

に中国の地域社会において再活性化しているといえる。一方で、1949年以前の同姓団体とは、異なる性格も帯びている。

## 3. 結論

本論文では、福建省南部に存在する同姓団体の形成とその背景およびその社会関係の機能について明らかにしてきた。本論で示したように、1949年以前、福建省南部における任意加入の社会結合としての同姓団体の形成は、宗族組織が発達した地域社会において、宗族の社会的需要に応じてできた産物である。1990年代以降に同姓団体が復興された理由としては、宗族組織の発達だけでなく、商業化という社会変動とも関係がある。地域社会の人々は、同姓団体を通して、自己の利益を保護・増加し、社会・経済地位を向上させるといった現実的な利益を求めている。

同姓団体は、海外の華人・華僑社会にも歴史的に広く存在してきた。同姓団体の形成とその背景については、すでに多くの研究の蓄積がある。その形成は移民先の社会という新たな社会環境に適応するために発展を遂げてきたものであり、移民の人々は同姓団体を新たな環境への適応を促す装置とし、それを通じて生活の安定や中華民族としてのアイデンティティの維持といった心理的・社会的保障を得ている（吉原 1988、1998、2000、2001、2002、2006；施 1976；宋 1995）。さらに、祖先祭祀を基盤とした同姓団体の生成要因は、中国人の持っている「尊崇敬祖」という文化的倫理観からも解釈されている（吳 1985）。

無論、中国人社会における同姓団体形成の要因としては、中国人の「同姓＝父系血縁」イデオロギー<sup>13)</sup>という理念がある。「同姓＝父系血縁」とは、中国文化の中に持続的に培われてきた社会理念であり、「姓」のシステムと深く結びつきながらそれに支えられてきた。漢族の「姓」は、数千年の歴史を持ち、漢族は世界中で最も早く「姓」を使用した民族の一つである。古来より原

則として同姓間では結婚が禁止され（同姓不婚）ており、他姓から男子を迎え入れることも禁じられ（異姓不養）、他姓とは区別されてきていた。子供が父の姓を名乗ることが続いていく限り、意識の上で、「同姓＝父系血縁」イデオロギーは中国社会全体において維持されつづけ、このイデオロギーのもとでの同姓団体の組織化が可能となる。

任意加入の社会結合としての同姓団体は、文化や信仰・社会理念といった要因だけでなく、様々な現実的要求に応じて形成され、機能していることは明らかである。福建省南部の事例で示したように、地域社会の秩序化、商業化といったアプローチは、中国人社会における同姓団体の形成と展開についての理解を深めることに有用である。

## 注

- 1) 同姓団体は通常一つの姓から成形されるが、複数の姓から構成される同姓団体は「聯宗」と呼ばれている（施 1976: 139-140）。本論文でも取り上げている柯蔡宗親会や董楊の宗族連合などは、聯宗組織である。複数の姓による聯宗組織の形成には、以下の三つの理由が見られる。異なる姓の人々が一人の共通の遠祖を共有したこと、異なる姓の数世代前の祖先の間で義兄弟の契りを結んだこと、あるいは養子縁組をしたことなどである。複数の姓が宗親会を作り上げる根拠はさまざまであるが、異姓間に「父系血縁」があることについて上記いずれかの理由を主張すれば、複数の姓の間の聯宗組織を作り上げることが基本的に可能である。
- 2) 1949年以前の宗族組織については、宗族の組織形態・構造・資産の設定・族譜の編纂・族長の権力・郷村社会統治における宗族の機能を取り上げた様々な論考が存在している（Freedman 1958、1966; 聶 1992; 鄭 1992; Han 1995、2001; 潘 2002a; 阮 2005; 秦 2005; 韓 2007）。また、東南中国における水利・稲作生産および移住・開発先の協力関係という農業社会の新開地モデルが、明代以降の宗族の組織化の契機という解釈も存在する（Freedman 1958、1966）。1980年代以降、共産党政権のもとでの宗族の復興について、宗族の復興過程とその要因・組織形態・資産・族譜の復興方法・郷村社会における宗族の社会的役割についての検討がなされている（聶 1992; 錢・謝 1995; Han 1995、2001; 潘 2002a; 阮 2005; 秦 2005; 韓 2007）。
- 3) 福建省南部地方において、複数の同姓宗族の間で共通の祖先の肖像画を供養する祖先祭祀儀礼は「迎祖」と呼ばれている。
- 4) 筆者は王連茂の紹介を通じて李姓の宗族を訪ね、李姓の同姓宗族の連合の歴史に関する聞き取り調査をしたことがある。
- 5) 歴史上、福建省南部地域における械闘の多発は、主に歴史学者や人類学者によって研究されてきた（劉 1936; 北村 1950; 陳 1991; 鄭 1992; 蘇 2000; 潘 2002a）。筆者の現地調査においても、械闘について耳にすることが多かった。例えば、清代末期に林姓と蔡姓の間で18年間に渡る械闘があったことや、王姓と邱姓の間で数年間に渡る械闘があったことについて聞き取りをしている。
- 6) 現在、福建省南部の宗親会の一部は、「某遠祖の學術研究会」の名称で、政府に社会团体として認められている。宗親会と政府の新たな関係構築は、本論文の第二章第四節を参照のこと。
- 7) 宗親会の個々の成員に対し、筆者は父系親族を意味する「宗親」のような民俗用語を使う。
- 8) これら7つの宗族には、1つの行政村に集中して居住している宗族もあれば、いくつかの行政村に分散して居住している宗族もある。図2で示しているのは、7つの宗族の村落分布図である。
- 9) 「鎮」とは、「行政村」以上、「県」以下のレベルの国家行政単位である。
- 10) この事例には、当時、福建省南部の経済発展が著しく、私営企業にとって銀行以外の民間資金も必要となっていた背景がある。
- 11) 「華商企業対華投資基本情報、新趨勢及引発的思考」『寧波市對外貿易經濟合作局網』、(<http://2008.nbfet.gov.cn/llyj/detail.phtml?newId=57266>)。
- 12) このことは、施振民、宋平、吉原和男によって明らかにされている（施 1976; 宋 1995; 吉原 1988、1998、2000、2001）。
- 13) 「『同姓＝父系血縁』イデオロギー」とは、同姓であることは父系血縁関係があることの証とするイデオロギーである。これは、吉原和男によって提唱された概念である（吉原 2000: 15）。

参考文献

陳支平

1991 『近五〇〇年来福建的家族社会興文化』上海：三聯書店。

陳夏晗

2000 『家族制興閩南私营企業』修士論文、厦門大学人類学研究所。

Freedman, Maurice

1958 *Lineage Organization in Southeastern China*. London: University of London, Athlone Press. (1991『東南中国の宗族組織』末成道男・西澤治彦・小熊誠訳、東京：弘文堂)

1966 *Chinese Lineage and Society: Fujian and Kwangtung*. London: University of London, Athlone Press. (1987『中国の宗族と社会』田村克己・瀬川昌久訳、東京：弘文堂)

福建省晋江市虞舜学术研究会編集

2002 『虞舜文化研究』第二期。

郭于華

1994 「農村現代化過程中的伝統親縁関係」『社会学研究』6: 49-58。

阮雲星

2005 『中国の宗族と政治文化—現代「義序」郷村の政治人類学的考察』東京：創文社。

Han, Min

1995 “The revival of tradition in northern Anhui: A response to social and economic changes.” In Suenari Michio and Christian Daniels (eds.) *Perspectives on Chinese Society: Anthropological Views from Japan*, 17-91. Center for Social Anthropology and Computing, University of Kent.

2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58). Suita: National Museum of Ethnology.

韓敏

2007 『回応革命興改革—皖北李村の社会変遷興延続』南京：江蘇人民出版社。

Huang, Shumin

1989 *The Spiral Road: Change in a Chinese Village through the Eyes of a Communist Party Leader*. Boulder: Westview Press.

石田 浩

1995 『中国同族村落の社会経済構造研究—福建省伝統農村と同族ネットワーク』吹

田：関西大学出版社。

晋江市比干学术研究会編集

1994 『比干文化創刊号』。

北村敬直

1950 「清代械闘の一考察」『史林』33(1):64-77。

劉興唐

1936 「福建的血族組織」『食貨』4(8):35-46。

聶莉莉

1992 『劉堡：中国東北地方の宗族とその変容』東京：東京大学出版会。

潘宏立

2000 「閩南地区宗親会的復興與跨国網絡：以福建省濟陽柯蔡委員会為例」陳志明等主編『伝統與変遷：華南的認同和文化』26-47頁、文津出版社。

2002a 『東南中国における漢族組織とその変容—閩南農村の宗族組織とその変容』東京：風響社。

2002b 「福建省南部農村の同姓結合と華僑—蔡姓の宗族および宗親団体を中心に」吉原和男・鈴木正崇編『拡大する中国世界と文化創造』117-144頁、東京：弘文堂。

2006 「福建僑郷の同姓組織與海外華人—石獅蔡氏宗族及其宗親組織的個案研究」陳志明・丁毓玲・王連茂編『跨国網絡與華南僑郷—文化・認同和社会変遷』55-76頁、香港中文大学。

錢杭・謝維揚

1995 『伝統與轉型・江西泰和農村宗族形態』上海：上海社会科学出版社。

秦兆雄

2005 『中国湖北農村の家族・宗族・婚姻』東京：風響社。

泉州六桂文史委員会編集

2005 『閩南六桂』。

施振民

1976 「菲律賓華人・華僑文化的持続—宗親会興同郷組織在海外的演變」『中央研究院民族学研究所集刊』42: 62-98。

石獅市王審知学术研究会編集

1998 『石獅太原堂簡介』。

宋平

1995 『承繼與嬗變—海外華人社団之變遷』厦門：厦門大学出版社。

蘇黎明

2000 『泉州家族文化』北京：中国言実出版社。

- 王連茂  
2006 「当代僑郷家族的『迎祖』活動—儀礼的象徴與伝統的変遷」陳志明・丁毓玲・王連茂編『跨国網絡與華南僑郷—文化・認同和社会変遷』113-138頁、香港中文大学。
- 吴燕和  
1985 「中国宗族之發展興其儀式興衰之条件」『中央研究院民族学研究所集刊』59: 31-142。
- 吉原和男  
1988 「移民都市のボランティア・アソシエーション」『文化人類学』5: 151-163。  
1998 「宗親總會と大宗祠がつなぐ」可見弘明・国分良成・鈴木正崇・関根政美編『民族で読む中国』263-301頁、東京：朝日新聞社。  
2000 「『血縁』の再構築—同姓団体の生成とその社会的機能」吉原和男・鈴木正崇・末成道男編『血縁の再建築—東アジアにおける父系出自と同姓結合』15-43頁、東京：風響社。
- 2001 「香港の同姓団体—移民に見る普遍性」塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編『流動する民族—中国南部の移住とエスニシティ』311-331頁、東京：平凡社。
- 2002 「タイ華人・華僑社会における文化復興運動—同姓団体による大宗祠建造」吉原和男・鈴木正崇編『拡大する中国世界と文化創造』240-264頁、東京：弘文堂。
- 2006 「宗族の生成・発達と現代の華人同姓団体」平田茂樹・遠籐隆俊・岡元司編『宋代社会の空間とコミュニケーション』367-384頁、東京：汲古書院。
- 鄭振滿  
1992 『明清家族組織興社会変遷』長沙：湖南教育出版社。

---

# The Emergence of the Surname Association before 1949 and Its Current Revival in Southern Fujian

CHEN Xiahan

The Graduate University of Advanced Studies,  
School of Cultural and Social Studies,  
Department of Comparative Studies

Lineages and surname associations are two common organizations of patrilineal descent in Chinese society. Both exist in southern Fujian. Before 1949, surname associations had emerged there under the order of the regional society with developed lineages. Subsequently, between 1949 and 1978 under the socialist regime, surname associations, like lineages, were criticized by the Chinese government and accordingly dissolved. However, since the 1980s, due to the reform and opening-up policy of the central government, surname associations, along with a renewed interest in lineages, have been revived. Although various studies on lineages have been conducted, the re-emergence of surname associations and their current situations have not been sufficiently understood and researched. This article focuses on surname associations and investigates the process of re-emergence and the situation of such social groups in earlier history and at the present time. To distinguish them from lineages, which are entered by simple fact of birth, surname associations are voluntary associations. The surname association emerged later than the lineage, and its emergence usually resulted from specific social needs and social vicissitudes. In a new social environment, people meet their own real demands and adapt to the new environment through participating in voluntary associations. Thus, in the voluntary formation and development of surname associations, their relationship with the social environment or social vicissitudes is an essential perspective. Southern Fujian, the place investigated, is a region with developed lineages, rapid economic growth, and an enormous number of merchants. Setting surname associations in this particular region as the object of study, this article analyzes, over two historical periods (that is, prior to 1949 and after the 1990s), the emergence and development of surname associations and their relationship with the changing social environment or social vicissitudes.

**Keywords:** southern Fujian, surname association, voluntary association, the order of regional society, commercialization